

「英語がわかる」ということ (2)

— 英語前置詞 at, on, in の場合 (英日中言語対照) —

高橋 順一

On Understanding English (Part 2): the case of English Prepositions ‘in’ ‘on’ and ‘at’ (A Contrastive Study of English, Japanese and Chinese)

TAKAHASHI Junichi

Abstract: How do we understand the spatial relationships? How do we express the spatial concepts? In short, the domain of space provides a particular clear view of most of the fundamental issues pertinent to language and to cognition. I have selected three basic prepositions in English, which are, *in*, *on* and *at*.

The purpose of this paper is to compare the spatial expressions in English, Japanese and Chinese and to elicit the linguistic and cultural principles among them.

1. はじめに

人は空間関係をどう捉え、どのように言語表現するのであろうか。このような疑問は、認知言語学の重要なテーマである。1980年代以降、認知言語学の発展とともに、言語学、認知科学、言語人類学、知識工学(人工知能)などの関連学問領域を取り込み、「ことばと空間」は今日、注目されるテーマになっている。¹⁾ 本稿は、空間認知と空間表現の関係を英語、日本語、中国語の対照研究に基づいて、それぞれの言語でどのような空間表現が存在し、どのような言語的、文化的原理が働いているのか、を英語の前置詞 at, on, in を取り上げながら考察する。

2. 英語、日本語、中国語における空間表現

まず、英語の空間表現である前置詞 at, on, in の代表例を挙げる。

- (1) a. The book is at the place where you left it.
- b. Julie is at the post-office.
- c. There are longing chairs at the beach.
- d. the suitcase on the stairway
- e. the man on the chair
- f. the music score on the piano
- g. the preserves in the sealed jar
- h. the milk in the glass

i. The baby is sleeping in the cradle. (以上、Herskovits,1986)

次に、日本語の空間表現を英語 (1a) ~ (1i) の対応文を取り上げ、代表例とする。

(2) a. その本は君が置いておいたところにある。

b. ジュリーは郵便局にいる。

c. 海岸にはラウンジチェアがある。

d. 階段にあるスーツケース

e. 椅子に座っている男

f. ピアノの上の楽譜

g. 密封された瓶の中の保存食品

h. グラスの中の牛乳

i. 赤ちゃんはゆりかごの中で眠っている。

最後に、中国語の空間表現の代表例を挙げる。

(3) a. 墙 上 挂着 菜单。 壁にメニューが掛かっています。

Qiáng shang guàzhe càidān.

b. 桌子 上 放着 什么? テーブルに何が置いてありますか?

Zhuōzi shang fàngzhe shénme ?

c. 草原 上 有 很 多 羊。 草原にはたくさんの羊がいます。

Cǎoyuán shang yǒu hěn duō yáng.

d. 我 在 中国 游览了 长城。 私は中国で万里の長城を観光しました。

Wǒ zài Zhōngguó yóulǎnle Chángchéng.

e. 蒙古包 里 没有 空调。 パオの中にはエアコンがありません。

Měnggǔbāo lǐ méiyǒu kōngtiáo.

f. 从 北京 到 长城 不 太 远。 北京から万里の長城まではあまり遠くありません。

Cóng Běijīng dào Chángchéng bú tài yuǎn.

(以上、戸沼 / 石田 / 那, 2005)

2. 1 英語における空間表現 (前置詞)

最初に、英語の前置詞 “in” について、考える。

(4) a. the water in the vase (花瓶の中の水)

b. the crack in the vase (花瓶の亀裂)

c. the crack in the surface (表面の亀裂)

d. the bird in the tree (木の中の鳥)

e. the chair in the corner (隅にある椅子)

f. the nail in the box (箱の中の釘)

(4a) ~ (4f) の句における in は包含、あるいは包圍の概念を表している。しかし、その状況を図示してみると、以下ようになる。(4a)においては、水は花瓶のくぼみによって定まった容積の中にいる。(4b)においては、ひび割れはひびがないとしたときに花瓶が占める空間の一部の中にある。(4c)は、表面は亀裂を含む薄片として捉えられる。(4d)では、鳥は木の枝の輪郭によって囲まれた中にいる。(4e)では、部屋全体の大きさ、対象の大きさ、隅にあるほかの対象の存在に依存しながら点

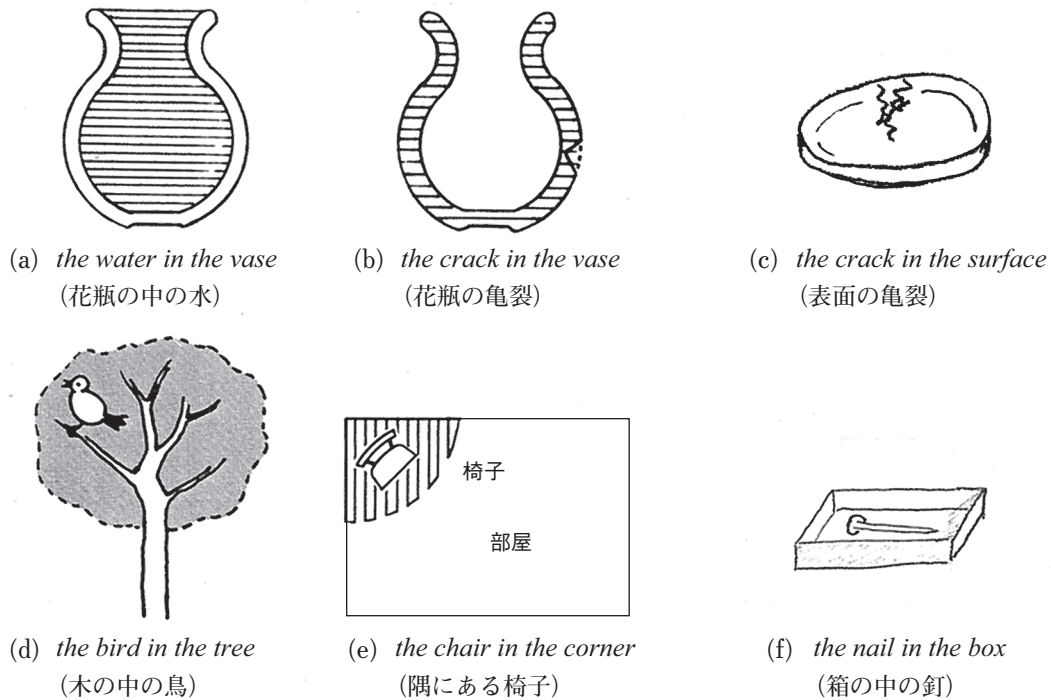


図 1 (4a) ~ (4f) のイメージ図 ((4a),(4b)(4d)(4e) は Herskovits(1986))

線部分の空間に対象物が存在している。(4f)は、曖昧性をもつ句で、釘は箱の側面に打ち込まれて埋まっているかもしれないし、箱の中に入っているかもしれない。このように、前置詞 *in* は、多様な文脈において、様々な種類の対象との空間関係において記述される。Herskovits (1986) は、*in* の理想的意味を次のように定義している。

(5) *in*: 幾何的構造物の 1, 2, 3 次元の幾何的構造物への包含

次に、前置詞 “*on*” の場合を考える。*on* の基本的な意味は、面あるいは線に対する接触である。

- (6) a. the carpet on the floor (床の上のカーペット)
 b. the village on the road (道の途中の村)
 c. the house on the lake (湖岸の家)
 d. a point on a plane (平面上の点)
 e. the shadow on the wall (壁に映った影)
 f. the chair on the door (ドアの上の椅子)
 g. On the left wall is a couch. (左の壁のところに長椅子がある。)
 h. *? A chest of drawers is on the wall.

(6a) は、床平面にカーペットが接触している。(6b)(6c) では、道路、湖岸の縁に接した土地、湖岸に村、家があり、道路上、湖面上に村や家があるのではない。(6d)(6e) では、点、影のように幾何的対象でも指示物体でも使え、接触は見かけ上のものである。ここで、「接触」の意味には幅があることがわかる。接触には、3次元の参照物体と指示物体の関係を考慮しなければならない。(6f) の場合、横になっているドアの上にある椅子ならば文法的であるが、ドアを押さえている椅子の場合は非文法的である。このような状況のとき、参照物体と指示物体の間に、顕現性 (*salience*) す

なわち際立ちが関与していると考えられる。(6g)(6h)はこれを支持する例で、(6g)では、left (左の)とか opposite (反対側の)のような修飾語がついた場合、注意が払われ、際立ちがあるので受け入れられる。(6h)のように、顕現性が低ければ、受容性に問題がある (Herskovits, 1986)。on の理想的意味を定義することは難しいが、Herskovits (1986)は次のように定義している。

(7) on : 幾何的構造物 X が線、あるいは面 Y に接触していること。Y が対象 y の表面であり、X が別の対象 x の占める空間であるとき、y が x を支持していること。

[[接触する] (contiguous) とは、線あるいは面が向きをもつ一つつまり、外側と内側をもつならば幾何学的構造物 X は Y の外部の空間の領域内に完全に位置しなければならない。]

Herskovits (1986) は、上の理想的意味は、一種のモデルとして on のすべての用法の中心となっていて、近似、類似、典型性を含む過程、種々の幾何的記述の選択は、すべてこのモデルによる、と述べている。最後に、位相前置詞 at の理想的意味を考える。

(8) a. The train is at Victoria Station. (列車はビクトリア駅にいる。)

b. We met at six o'clock. (私たちは6時に会った。)

c. Mary is at the window. (メアリは窓のところに入る。)

d. The center of the circle is at the intersection of the axes. (円の中心は直径の交点のところである。)

e. The car is at the corner of 6th and Broadway. (車は六番街とブロードウェイの曲がり角にいる。)

at の理想的意味は以下である。

(9) at: ある点が他の点と一致すること。

(8a)においては、駅は軌道上の点と考えられる。(8b)は、時間表現であるが、上述の理想的意味を満足し、時間は数直線として脳内において概念化されている。特に、時間は「時計」という時間を数字と点で表した道具を用いて認識されるので、正確な時刻は時間における参照されている点と一致する。ただ、空間概念がなぜ時間概念にも用いられるのかの疑問は残る。(8c)は、メアリが窓に極めて近い場所にいると考えられ、2つの対象間の最も近い関係を表し、点というよりは領域である。(8d)は、幾何的対象の一致である。この一致性にも正確な一致と非常に近い近似的一致がある。(8e)は、車と曲がり角との点的一致ではなく、領域である。このように at の様々な用法をみると、at は段階的概念 (graded concept) をもつと考えられる。

Herskovits (1986) は、前置詞の理想的意味に現れる基本的な空間概念を (1) 位相的、(2) 幾何的、(3) 物理的、(4) 投影的、(5) 側度的の5つのクラスに分けている。

2.2 日本語における空間表現 (空間名詞+空間辞)

そもそも日本語における空間表現とは何か、を出発点としなければならない。英語には、すでに見たように空間表現は前置詞にその典型的例を見ることができる。単に、日英語を対比し、英語の日本語訳を考えて、空間表現の相違を決めるわけにはいかない。例えば、an apple in the box は「その箱の中の林檎」と訳され、英語の前置詞 in に相当する日本語は、「中の」であるので「中の」が空間表現である、と言い切ってよいであろうか。英語の前置詞は、語の配列を基準に、「前置詞+名詞」を基本単位として、名詞の前に置かれていることを捉えた名称である。前置詞 (preposition) は、ラテン語 praepositio (前に置くこと) — pre- (の前に) + position (置くこと) = 名詞の前に置くこと — によ

来していることは周知の事実である。これを踏まえ、日本語の「中の」を後置詞 (postposition) と呼ばれることもあるが、一般には、中 (名詞) + の (助詞) (寺村秀夫, 1992:237)、名詞の格語形「ノ格」(高橋太郎, 2005:46) と分析されるが、本稿では、「空間名詞+空間辞」(田中・松本, 1997) を用いる。

日本語の空間表現は差し当たり次の型に分析する。

(9) 「空間名詞+空間辞」型：[中に、上で、下まで、外へ、等々]

従って、次の例文では「中」が空間名詞、「に、で、から、まで、へ」を空間辞とする。

(10) a. 山の中に洞窟がある。

b. 山の中で遊ぶ。

c. 山の中から出てくる。

d. 山の中まで進む。

e. 山の中へ入っていく。

次に、英語の前置詞と日本語の空間辞の相違は何を意味するのか。田中・松本 (1997) は、日英語の例文を取り上げ、次のように分析する。

(11) a. 太郎は台所の中にいる。

b. John is in the kitchen.

英語は空間関係を前置詞的に処理する傾向が強いのにに対して、日本語はそれを助詞的に処理するという傾向が強い。英語の表現では、2つの名詞項が認められ、それら (be) in によって空間的に— IN (John, the kitchen) として一関係づけている。ところが、日本語の表現には、「太郎」「台所」「中」の3つの名詞項が存在し、それらの関係づけは「は」「の」「に」の3つの助詞が行っている。これが、前置詞的処理と助詞的処理の違いである。田中・松本 (1997) の説明では、なぜ英語が前置詞的処理を行い、日本語では助詞的処理を行うのか、また、日英語の空間認知がどう違うのかの十分な解答にはなっていない。言語における空間認知と空間表現の関係を本質的に、把握するためには、人間の心的イメージ (mental imagery) の存在を考えなければならない。

2.3 中国語における空間表現 (介詞)

まず、中国語における空間表現を日本語の空間表現と比較してみる。日本語では、すでに見たように、空間表現を「空間名詞+空間辞」と捉えたが、中国語には、日本語の空間辞にあたる形態はない。しかし、英語の前置詞に似た介詞と呼ばれる一群の語がある。介詞は、目的語と一緒に「介詞フレーズ」を作り、文中で状語 (連用修飾語) として、場所、時間、原因、対象等を表す働きをする。次の例文におけるゴシック体で表された語が介詞で、後の下線部はその目的語である。

(12) a. 我 在 工厂 工作。

Wǒ zài gōngchǎng gōngzuò.

(私は工厂で働いている)。

b. 他 从 上海 回来。

Tā cóng Shànghǎi huí lái.

(彼は上海から帰ってくる)

- c. 我 跟 他 商量。
 Wǒ gēn tā shāngliang.
 (私は彼と相談する)

(以上、相原茂 / 石田知子 / 戸沼市子, 2009 : 124)

方美麗 (2004) は、中国語の空間表現は、動詞が名詞の前に立つ「動賓構造」と動詞に補助動詞がつく「動補構造」、介詞を伴った名詞が動詞の前に置かれる「介詞構造」の三つのタイプで表現される、と述べている。(方美 2004:6-11) また、日本語の「空間名詞 (に格 / へ格) + 方向性の移動動詞」が中国語の“方向性の移動動詞 + 地名名詞、地点名詞、凹面名詞”と対応するとし、次の例を挙げている。

- (13) a. 山の頂上へ出た。「伊豆の踊子」
 到了山顶…。対訳
- b. 村人たちは野に出て仕事をはじめていた。「走れメロス」
 村子里的人到田野里开始工作。対訳
- c. 信州へ出るのは、この御番所が、第一の難関であった。「入れ札」
 去信州，这个关卡是第一个最难过的…。対訳
- d. 畑に出る (『中日大辞典』) p.2000
 下田。(『中日大辞典』) p.2000
- e. アトリエへ行って絵を見せてもらい、…。「胡桃割り」
 我们到书室观看了他的画。対訳

しかし、日本語の「に格の空間名詞」と中国語の“地名名詞、地点名詞”、“凹面名詞、凸面名詞”とは次のような違いがある、とする。中国語の連語において、動詞と組み合わせる名詞は、日本語に比べて、動詞の語彙的な意味に強く制限され、“去、回、到”のような目的地に向かって移動する動作を表す移動名詞と組み合わせられるのは、動作の目的地となるような空間名詞に限られる。この空間名詞は、目的地として到着可能な場所ではなく、地名名詞、地点名詞に限定される。従って、“山”や“海”のような名詞は、“去、回、到”などとは組み合わせられない。中国語の“山”は登らなければ到着できない場所であり、“海”は航海する、あるいは、潜ったり、泳いだりする場所である、と考える。また、目的地として到着可能な場所になるためには、方位詞のよって、到着が可能な部分 (“去山上” “去海辺”) を明確にしなければならない、と考える。

日本語の場合、「に格の名詞」には、「山に行く」、「海に行く」のように方向性の移動名詞であれば、可能な表現になる。日本語の場合、「山に行く」という表現は、山のどの部分 (山の麓、中腹、頂上など) でも表現として可能である。このことは、同じ移動動詞と空間名詞との組み合わせは、中国語では、場所性が細かく、厳密に限定されていると言える。以上、英語、日本語、中国語における空間表現について検討してきた。次に、このような空間表現の相違はどこからくるのか考えてみる。

3. 心的イメージとしてのイメージ・スキーマ

英語前置詞の空間的な用法は、幾何的概念化の中間レベルが仮定されない限り理解できない、と

し、Herskovits (1986) は、心的イメージについて、次のように述べている。

(14) 「私は、この中間レベルを純粹にデータの調査に基づいて仮定してきたが、それは心理言語学的仮説、すなわち、あるレベルの心的イメージが知覚表象と言語とを仲介することへと自然につながる。このイメージのレベルは自然と規準的レベルと同じところになる。」 (Herskovits, 1986,p.95)

心的イメージについては、「認知言語学キーワード事典」の心像 (imagery) / イメージ (image) / 心的イメージ (mental imagery) の項目で次のように定義している。

(15) 「心像とは一般に脳内において生成・記憶・想起される表象 (representation) のことで、視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚、体勢感覚など様々な感覚様相ないし感覚モダリティによって構成される言語以外の内的表象のことを指す。」

現在、言語と心像の処理過程に対する神経心理的研究が盛んに行われ、脳機能像による研究を基礎に、認知言語学、認知心理学ではイメージ・スキーマという心像を抽象化した基本的スキーマ群を考えている。²⁾

3.1 イメージ・スキーマの実在

イメージ・スキーマの実在についての最新報告が読売新聞紙上 (平成 21 年 9 月 21 日朝刊) でなされている。同紙上「脳科学の最先端一心を読む」で、国際電気通信基礎技術研究所神経情報研究室の神谷之康室長は、脳波形に代わり、機能的磁気共鳴画像 (fMRI) という装置で測定した脳血流の変化から、他人の心の中を読み取ろうとしている。これは脳神経が活動する際に出す電気信号を解析し、解読する「神経デコーディング」といわれる手法を用い、2000 年 12 月に、人が見ているアルファベットや図形を大脳の視覚野から直接読み取ることによって初めて成功したものである。そのメカニズムは、図 2 で示される。

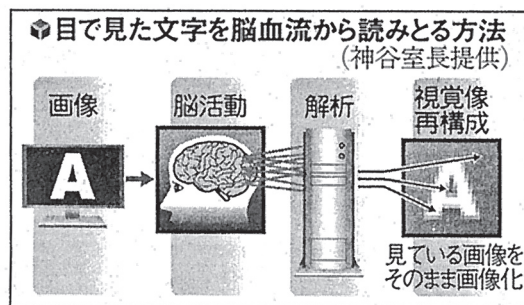


図2 視覚像再構成のメカニズム

澤口 (1986) は、認知心理学が明らかにしてきた多重知性 (multiple intelligences) を生物学の視点で考察し、多重知性の脳構造と進化の生物学的モデルを提示している。多重知性の種類の詳細はまだ明らかではないとしながら、次の5つの知性を挙げる。

- (16) a. 言語的知性: 言葉の知覚と理解、記憶、及びそれらにもとづく行動発現 (発話と書字)
- b. 空間的知性: 対象の空間関係の知覚、記憶とそれらにもとづく行動の組み立て。
- c. 論理数学的知性: 数学的記号の理解とその論理的操作。
- d. 音楽的知性: 音楽の知覚と理解、記憶、およびそれらにもとづく歌唱、演奏。
- e. 身体運動的知性: 身体の姿勢や運動状態の知覚、記憶、それらにもとづく行動発現。

これらの各知性はそれぞれ階層性を持ち、より細分的で特異的な働きから、より包括的で総合的

な働きによって階層的に構造化されている、と言う。(澤口、1986:15)

これまで見た英語、日本語、中国語の空間表現は、上述の空間的知性の言語化と捉えることができる。空間的知性について、澤口(1986:37)は、次のように述べている。

(17) 空間関係の知覚や記憶には聴覚も関与するが、聴覚による空間関係の認知と記憶の神経経路は詳しく解っていない。おそらく第一次聴覚野→高次聴覚領野群→前頭前野の46野という経路が重要であろうが、証拠は十分ではない。空間関係の知覚に最も重要なのは視覚であり、空間視の神経経路は比較的良好に解っている。この経路は形態視の神経経路とは明確に異なる。その空間視の経路は第一次視覚野の層状の構造(モデルではコラムに対応)から始まり、次のような経路をおおまかにもつ。

(18) 第一次視覚野(V1) →第二次・第三次視覚野(V2・V3・PO) →側頭連合野

(MSTなど)・頭頂連合野(7a・VIPなど) →前頭前野(8→46) →6野の小区画→運動野の小区画(()内の記号や数字は視覚野の階層的構造を表すが、詳細は省略)

以上、イメージ・スキーマの存在について、言語学、生理学、心理学、生物学の領域を総合的に捉えた認知脳科学の視点から、その一端を見た。

3.2 イメージ・スキーマによる空間的意味からの拡張

2節において、英語の基本的な前置詞 in, on, at の様々な用法を日本語、中国語と対照させながら、それぞれの空間表現を分析してきた。この基本的な空間的概念の言語化においても、場面の特性とそれらを表す言語形式との間には複雑な様相があることがわかった。さらに、基本的な空間的概念が多く様々な非空間的状况にも適用されるという事実がある。認知言語学では、これをイメージ・スキーマの拡張と呼んでいる。³⁾ 例えば、

(19) a. 汚水が川に流れ込んだ。

b. ファンが会場に流れ込んだ。

(20) a. 太郎は部屋にいる。〈物理的〉

b. 次郎はあの集団にいる。〈社会的〉

c. 次郎は愛のまっただ中にいる。〈心理的〉 (工藤他、1995:259)

(19b)において、人の集まり(ファンや群衆)は、(19a)のように液体ではなく、固体としての個々の存在の集まりに過ぎない。しかし、われわれは、(19b)における移動が広い意味で容器のイメージ・スキーマの一種とみなされ、イメージの拡張によって、液体の移動と同じように認知される。(20)は、空間領域が広い意味で容器のイメージ・スキーマの一種とみなされ、(20a)の空間的イメージ・スキーマが(20b)(20c)の社会的、心理的な空間イメージ・スキーマに拡張された事例である。(19)(20)の空間的領域は、人間が日常生活において、様々な行為を営み、この行為を介して具体的なイメージが作られ、空間の一部が境界のある領域として認知されたものである。(更なるイメージ・スキーマの拡張については、Lakoff(1987). Taylor(1989)を参照。)

Lee(2001)は、空間的関係の言語化には、抽象化や理想化の過程が含まれていて、空間概念と非空間概念の間に明確な境界はないと述べ、次の例を挙げている。

(21) a. The sun is out ; The stars are out. (太陽が出ている ; 星が出ている)

b. The light is out ; The fire is out ; He blew the candles out.

(灯りが消えている；火が消えた；彼はろうそくを吹き消した)

(21a)(21b)は、両方とも前置詞 out が使われているが、(21a)では、太陽や星が‘out’の時には見えるのに、光やろうそくは‘out’の時には見えない。

(22) a. He blew up the balloon. (彼は風船をふくらませた。)

b. He rolled up the carpet. (彼はカーペットを巻き上げた。)

(22)は、前置詞 up が反対の意味になる。(22a)では大きくなりつつあるモノを指す表現の一部であるが、(22b)では、モノは小さくなりつつある。(21b)の反対は、He rolled out the carpet. (彼らはカーペットを広げた。)であって、He rolled down the carpet. ではない。以上の例は、前置詞がすべて同じ意味を持つのではなく、反対の意味が、一見お互いに無関係に思われる前置詞によって表されることを示している。

Lee (2001)は、前置詞と意味の関係には次の可能性があるとして、次の5点を挙げている。

(23) a. 同一の前置詞が反対の意味を表しうる。

b. 反対の意味が無関係な前置詞によって表される。

c. 通常反対の意味を表す前置詞が似たような意味を表す。

d. 通常反対の意味を表す前置詞が無関係な意味を表す。

e. 似たような意味が無関係な前置詞によって表される。

まさに、英語の前置詞の用法は、カオスの世界といっても過言ではないが、実際は、多くの共通のイメージがあり、このイメージは、日本語、中国語でもほぼ同じである。英語、日本語、中国語における空間表現のイメージ・スキーマは多くの共通点を持つことを次節以下で示すことにする。

4. 空間表現における言語学的原理

これまで、空間表現を日英語比較、中日語比較を行って、日本語における空間辞としての助詞、英語における前置詞、中国語における介詞の実例とその説明を行い、助詞と前置詞と介詞は、それぞれ、その役割が異なっていることが分かった。前置詞が事物の空間関係を明示するのに対し、助詞はそれをほのめかすという役割を担っている(田中・松本,1997:50)。次に、日英中語における助詞、前置詞、介詞の相違点を見る。

(24) a. 彼女は京都に住んでいます。

b. She lives in Kyoto.

c. 她居住在京都。 Tā jūzhù zài jīngdū.

d. 彼は上海から帰って来る。

e. He comes back from Shanghai.

f. 他从上海回来。 Ta cóng Shànghǎi huí lái.

(24a)～(24b)において、下線部「に」、in、在が、(24d)～(24f)において、下線部「から」、from、从が意味関係において対応する。しかし、日本語の「に」と英語の in、中国語の在は、日本語の「に」には具体的意味がなく、英語の in、中国語の在には明確な意味がある。一方、日本語の「から」、英語の from、中国語の从には、意味上、「出所」、「起点」などの具体的意味がある。このように、日本語の助詞、英語の前置詞、中国語の介詞は、意味の上で対応している場合もあればそうでない場合もあることがわかる。

田中・松本 (1997) は、空間表現の日英語比較の可能性の項において、日英語の空間表現は、助詞言語と前置詞言語の違いであるとし、日本語の空間名詞と空間辞の結合型であるが、情況的支えがあれば空間名詞は零化され、助詞が空間辞として機能すると、述べている。さらに、上述の「に」と「から」の具体的意味の相違については、次のように述べている。

空間辞と分類される助詞の中でも、「から」「へ」「まで」は、本来的な空間辞であるが、「に」「で」「を」は、空間辞化された空間辞として機能する。「から」「へ」「まで」は、それぞれ、〈出所〉〈方向〉〈限界点〉という具体的意味にほぼ結びつくが、これは助詞の中でも特殊事例とみなすことができよう。「に」「で」「を」は、具体的意味を本来的に内蔵した助詞ではない。それに対して、英語の前置詞は、本来的に空間辞であり、独自の具体的意味を喚起する力を備えている。

つまり、日本語の助詞は、(内容語の)日本語の助詞は、(内容語の)チャンクを意味素材にして事態を構成する際に整序を与える働きをし、その整序の仕方を示す固有の操作子機能を備えている。関連づけ機能という点においては、前置詞も同様の機能を持つが、両者の際立った違いは、具体的意味の身分にある。(田中・松本:1997:62) 田中・松本 (1997) は、日英語の空間表現の相違を空間辞と前置詞の意味の具体性に関係付けている。また、英中語の空間表現は前置詞と介詞の意味の具体性においてきわめて類似している。次に、空間表現における日英中語の違いはどこから来るのかを考える。

5. 言語における空間表現とパースペクティブ

認知言語学では、言語で表されている状況が人間と切り離して客観的に存在するとは考えず、人間が外界を見るときには、必ず複数ある選択肢のうちのある一つの切り取り方・見方をとり、それが言語表現に現れている、と考える。すなわち、事態の解釈には、人間の状況をどの視点から捉えるかというパースペクティブが意味構造に重要な役割を与えているというのが認知言語学の基本的姿勢である。次に、具体例を挙げてみる。

(24) a. 私は明日シカゴに行きます。

b. 私は明日シカゴに来ます。

c. I'll go to Chicago tomorrow.

d. I'll come to Chicago tomorrow. (以上、河上,1996:14)

日本語の (24a) は、話者が今シカゴにいない場合に、(24b) は、話者が今シカゴにいる場合に発話される。この場合、ある基点を設けて、そこから離れて移動する場合には「行く」が、その基点へ向けて求心的に移動してくる場合には、「来る」が、普通用いられる。英語の come/go の場合、聞き手の領域は話し手の領域と区別なく同じだと考え、この領域内での移動は come であり、それ以外の移動は go と表される。(24d) の場合、シカゴの友達と電話をしていて、問題なく用いられる。すなわち、話者は発話視点を自分だけではなく、聞き手の側にもおくことができる。以上、(24) の例文は、come/go の使用には、視点の概念が関係することを見た。

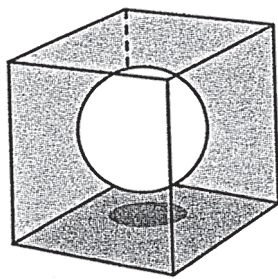
田中・松本 (1997) も空間表現と視点との関連について以下のように述べている。

人は、通常、事物の空間関係を捉える際に、特定の視点を(手続き的に)採用して、空間関係の把握(「空間把握」)を行うのではなく、状況と適合する見方(だけ)をするという方が実相に近い。主体の意識に即して言うならば、「xとして見る」のではなく、端的に「xが見える」のである。

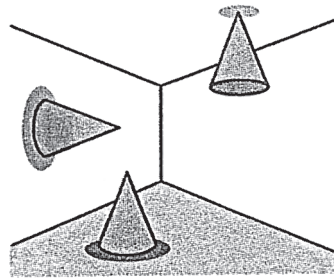
つまり、主体に対して自然に見えてくる空間関係こそが＜状況に適合した空間関係＞にほかならない。われわれは、「xが見える」という事態を反省的見地に立って説明する際に、「視点」という概念装置を導入しているのである。言い換えれば、説明上、「空間表現は主体がある空間関係をどのように把握したかを反映するものである」という前提に立って、その上で、把握の仕方〔認知の仕方〕を説明する手段として「視点」という概念を援用するのである。(田中・松本:1997:103)

このように空間表現は人間の基本的な日常経験から生じる様々なモノの見方すなわち視点が関わっている。英語、日本語、中国語における空間表現では、上述の人間に基本的なイメージが共通に関わっていると考えられる。英語前置詞 in, on, at を例にとると、それぞれの普遍的イメージは以下のように表すことができる。⁴⁾

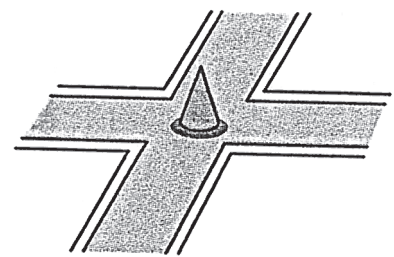
in は基本的に＜空間内＞を表し、典型的には、3次元の空間を持つ「容器」のイメージである。on は基本的に＜接触関係＞を表し、at は＜場所＞そのものを表す。



(25) in



(26) on



(27) at

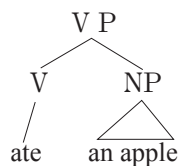
図3 英語前置詞 in, on, at の普遍的イメージ

6. 英語、日本語、中国語における空間表現と言語学的原理

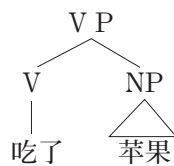
これまで、英語、日本語、中国語における空間表現を対照的に見て、空間表現における共通のイメージを英語前置詞 in, on, at を中心に考えてきた。この節では、語順の相違点から、空間表現と文化の関係について考えてみる。

自然言語の主語 (S)、目的語 (O)、動詞 (V) の相対的基本語順を考えてみると、英語は S V O 言語、日本語は S O V 言語、中国語は S V O 言語であり、英語と中国語は同じ S V O 言語である。SVO, SOV 言語において、O と V が V P (動詞句) という一つの単位を作り、V が V P の中心をなし、V が主要部と呼ばれる。英語、中国語では主要部 V は V P の先頭に来ている。日本語では、主要部 V は V P の末尾に来ている。具体例は以下である。

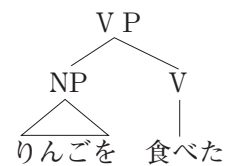
(28) 英語



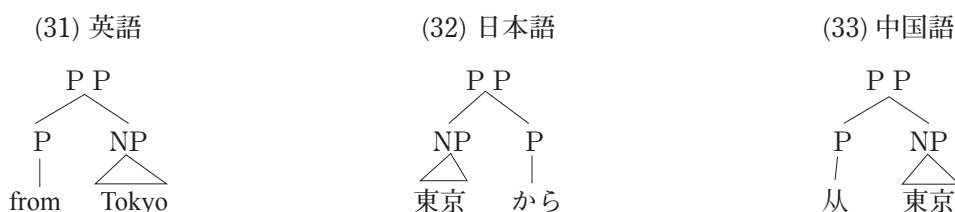
(29) 中国語



(30) 日本語



次に、これまで取り上げた英語の前置詞句 (P P) を考える。(P P は前置詞句 (prepositional phrase)、 P は前置詞 (preposition)、 N P は名詞句 (noun phrase) を表す。)



生成文法では主要部の位置を先頭か末尾に決めることを「主要部パラメータの設定」と呼び、英語、中国語における動詞句、前置詞句のように主要部の値が先頭である言語のことを主要部先頭型言語、日本語のように主要部の値が末尾にある言語のことを主要部末尾型言語と呼ばれる。以上、基本語順においては、英語、中国語は同じ主要部先頭型言語、日本語は主要部末尾型言語となり、英中日言語は区分される。

以上、まとめると次のようになる。いずれの言語も主語 (S) は文の先頭に位置し、両言語の相違は、 V O , O V である。すでに動詞句においては動詞が主要部になることは指摘した。主語、目的語は文中における機能を表す文法用語であり、動詞と区別される。動詞を主要部とすると主語と目的語は同じ位置づけ (動詞を中心に左か右かの左右対称) である。このことから、英語、中国語は V を中心とし、 S と O が対照をなす対称性言語、一方、日本語は V が最後に位置し、 V との関係で S と O が非対称になる非対称性言語とすることができる。

7. 英語、日本語、中国語における空間表現と文化的原理

6 節において、英語、中国語は対称性言語、日本語は非対称性言語と一応結論付けた。このことが文化の面とどのような係わりを持つのかを考え、本稿の結論としたい。ことばと空間の関係は古くて新しい問題である。例えば、牧野 (1978) は、『ことばと空間』第一章語順と空間において、日英語の語順とその機能の点から次のように述べている。

日本語の語順は伝達内容の核心をいわば致聖所 (サンクチュアリー) とする構造で、話し手は一従って、聞き手も一次第に致聖所に近づいて行くのである。ところが、英語の場合は始めから話し手は致聖所に立っていて動かないで、全体のパースペクティブを持っている。日本語の場合は内の内なる致聖所へ動いて行くという空間移動があり、しかもそこいらにニセの致聖所があり、聞き手には話し手がどれを目標にしているかはすぐには分からない。英語では一步入ったところで止まり、そこから全体の眺望が得られる。話し手の視点が固定する傾向が非常に強いのである。(牧野, 1978:4) 牧野 (1978) は、日英語の相違をかなり遠まわしな表現で述べているが、日英語における空間の基本的な具体例として、日米の家の構造に注意を向けている。日英語における空間構成の機能と語順の機能を次のようにまとめている。

	日 本	アメリカ
語 順	線条的に最後に来ないと話者の意図の枠組みは明確にならない。終わりまでのいくつかの段階で意図を変えることができる。	線条的に最初の部分で話者の意図の枠組みが明確になる。
空 間	空間を次第に中に入って行き、奥に行きつくまでが段階的で、はじめの意図を変えることができる。	空間使用に段階がほとんどなく、はじめの方で入るかどうかが明確にきまる。

牧野 (1978) は文化との関連で、「日本語は文末に神経を使っている言語であり、日本人は好んでことばの緩衝地帯を作ってしまうが、文化の性格づけは究極的にはなにか好みの問題に帰されるような気が私にはするからである」と結論している。最後に、具体的なアメリカでの生活経験をもとに納得いく事例を挙げているが、牧野の根底には、自ら述べているように、サピア・ウォーフの仮説 (Sapir-Whorf Hypothesis)⁵⁾ に対する信念があると言える。以上、日英語におけることばと空間の関係における文化的原理は次のようになる。

(34) 日本語の語順も日本の空間構成も非常に閉鎖的で、奥にたどり着くのに一つ一つ段階的に扉が開いて行くのに対して、英語の語順もアメリカの空間構成も極めて開放的で、大きな扉がすぐ開かれて、そこから全体の眺望が得られる仕組みになっている。(牧野、1978:24) (下線部は筆者)

次に、語順と思考の関係について、加藤周一 (2008) は、『日本文化における時間と空間』第2章時間のさまざまな表現で、次のように述べている。

(36) 語順のちがいは、話し手の、また聞き手の、思考の順序のちがいを反映するだろうか。このように (例文「私は日本人です。」「私は米を食べる。」を指す。) 単純で、短い文の場合には、思考の順序のちがいが、少なくとも表面にあらわれないだろう。…しかし、文が複雑で、長くなると、語順と思考の関係が、強く意識されるようになる。(加藤、2008:43-44)

加藤 (2008) は、中国語や近代ヨーロッパ語とくらべて、日本語の特徴の一つは、文の語順であるとし、日本語の語順では、修飾語 (または句) を被修飾語の前に置くが、ヨーロッパ語のように修飾語 (または句) を被修飾語の後に置くための文法的手段—名詞の所有格、前置詞、関係代名詞など—は、日本語にはないということ、文末に動詞を置かざるを得ない語順の原則は、全体を知る前に細部を読むことを読者に強制する、と主張する。中国語、英語では読者の注意が全体から細部へ向かい、日本語では細部から全体へ向かうというのが加藤の語順論のまとめであり、このことが中国文化、ヨーロッパ文化、日本文化のさまざまな文化の相違に繋がっている、と考えている。(加藤、2008:48)

次に、日中文化に関する多くの著書がある陳舜臣 (2005) は、『日本人と中国人』において、中国人がシンメトリー (相称性) をよるこぶ性格があり、中国は文字の国であるので、律詩などでは左右が必ず対をなしている、と述べている。(陳、2005:172)⁶⁾

さらに、「均整のとれたものこそ“中国の美”であり、漢詩において対句にしなければならない規則があるのも、根ざすところは深く、中国人にとって、均衡のとれていないものは『美』ではない。極端にバランスのくずれたのは、罪悪の部類にはいる」とまで断言している。(陳、2005:175) また、「日本ではこのようなシンメトリカルな美は、それほど高く評価されなかったようだ、とし、バランスがとれているのは、そこに人間の力が加えられているからである」と結論を述べている。(陳、

2005:176) 具体的な文化面では、日本の茶道にアンシンメトリーが現れていると岡倉天心の茶室つくりを挙げている。

以上、牧野、加藤、陳氏の日本語、英語、中国語に対する文化的原理を簡潔にまとめると次のようになる。⁷⁾

	日本語	英語	中国語
牧野	閉鎖的	開放的	開放的*
加藤	細部から全体	全体から細部	全体から細部
陳	アンシンメトリー	シンメトリー*	シンメトリー

* *欄は特に言及されていないが、英語、中国語の基本語順の類似点を考慮した場合推測される。

8. おわりに

本稿では、人は空間関係をどのように捉え、どのように言語表現するかを知るために英語、日本語、中国語の空間表現を取り上げ、英語の前置詞 in, on, at、日本語の空間辞（助詞）、中国語の介詞を取り上げ、英日中言語の特徴を見てきた。次に、人間言語の視点から、心的イメージとしてのイメージ・スキーマ、イメージ・スキーマの实在を認知言語学、脳科学におけるいくつかの知見を取り上げた。さらに、これらの言語における類似点と相違点を基本的語順に焦点を当て、言語学的分析を試みた。また、基本的語順の言語的分析から文化的原理がどのように働いているか、さまざまな考え方をみることによって、人間における言語、思考、文化との密接なつながりを再確認した。

註

- 1) 「ことばと空間」をテーマとした特集が月刊『言語』2008, Vol.37-No.7 大修館書店でなされた。また、1994年3月22日～25日 Gerhard Mercator University of Duisburg において、“Language and Space”に関する国際 L.A.U.D. (Linguistic Agency University of Duisburg) シンポジウムが開催され、そのときの論文集 Martin Pütz/René Dirven (eds.) (1996) *The Construal of Space in Language and Thought*. Mouton de Gruyter が刊行されている。
- 2) イメージ・スキーマを最初に導入したのは、Johnso, M. (1987) *The Bodily Basics of Meaning, Imagination, and Reason*. Univ. of Chicago Press. (菅野盾樹・中村雅之 (訳) 1991 『心のなかの身体—想像力のパラダイム転換』 紀伊國屋書店) である。
- 3) イメージ・スキーマの拡張については、山梨正明 (2004) 『ことばの認知空間』 開拓社、山梨正明 (2009) 『認知構文論』 大修館書店を参照。
- 4) 前置詞 in, on, at の普遍的イメージ図は下図でも同じである。

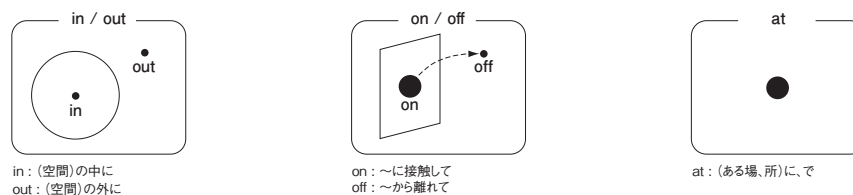


図 (i) 前置詞 in , on , at の普遍的イメージ図 (松永暢史・河原清志 (2003) 『絵で英文法』 ワニブックス)

- 5) 「言語相対説」とも呼ばれ、「母語によって、その話者の思考や概念のあり方が影響を受けるという仮説」詳しくは、辻幸夫（編）『認知言語学キーワード事典』 研究社 p.70、平林幹郎（1993）『サピアの言語論』 勁草書房 pp.194-212 を参照。
- 6) 日本語と中国語との対照研究による文化的原理については、今後の課題である。盧 濤 (200) 『中国語における「空間動詞」の文法化研究—日本語と英語との関連で—』 白帝社 参照。
- 7) 榎垣実 (1985) 『日英比較語学入門』 大修館書店 .p.183 は、英語、日本語があらゆる点で完全に対照であり、次のような文法の根本原理があるとする。

英語	日本語
考え方 …………… 自主的・合理的	受容的・忍従的
対自然 …………… 対等→支配的	従属的→点景
中心点 …………… 主体の行為	場面・雰囲気
表現原理 …………… 論理性・抽象性	気分性・具体性
表現形式 …………… 遠心的・外向的	求心的・内向的
表現性格 …………… 動的・積極的	静的・消極的
語 順 …………… 主語→述語→目的語	修飾語→述語
文の中心 …………… 主語（文頭）	述語（文末）
文の形式 …………… 頭でっかち	末ひろがり

また、Hinds (1999:27-29) は、英語 Person focus, 日本語 Situation Focus, 池上嘉彦 (1982) は、英語「する」的言語、日本語「なる」的言語、安西 (1983:39-62)、木村 (2001:5-7) をまとめると、次のようになる。

英語らしさ	日本語らしさ
Person focus	Situation focus
主語に人	主語に人を避ける
他動詞構文	Be 動詞、自動詞構文
所有 (Have) 構文	存在 (Be) 構文
<する>方表現	<なる>型表現
<もの>的捉え方	<こと>的捉え方

Hinds, J. 西光義弘注 (1999) Situation vs. Person Focus 『日本語らしさと英語らしさ』 くろしお出版、池上嘉彦 (1982) 「表現構造の比較—<スル>的な言語と<ナル>的な言語—」 『日英語比較講座第4巻 発想と表現』 大修館書店、安西徹雄 (1983) 『英語の発想』 講談社、木村哲也 (2001) 『英語らしさに迫る』 研究社、荒木博之 (2002) 『日本語が見えると英語も見える』 中公新書、中央公論新社、森田良行 (1998) 『日本人の発想、日本語の表現「私」の立場が言葉を決める』 中公新書、中央公論新社、鈴木孝夫 (1993) 『閉ざされた言語・日本語の世界』 新潮選書、新潮社を参照。

参考文献

相原茂・石田友子・戸沼市子 (2009) 『Why? に答える初めての中国語の文法書』 同学社
Annette Herskovits (1986) *Language and Spatial Cognition*. Cambridge University Press (宮下修司 / 西田

- 豊明 / 山田篤共訳 (1991) 『空間認知と言語理解』 オーム社
- 陳舜臣 (2005) 『日本人と中国人』 恒文社
- 方美麗 (2004) 『「移動動詞」と空間表現—統語論的な視点から見た日本語と中国語』 白帝社
- 加藤周一 (2008) 『日本文化における時間と空間』 岩波書店
- 工藤浩・小林賢次他 (1995) 『日本語要説』 ひつじ書房
- 河上誓作編 (1996) 『認知言語学の基礎』 研究社出版
- Lakoff, George. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal About the Mind*. Chicago: University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作ほか (訳) 『認知意味論：言語から見た人間の心』 紀伊國屋書店)
- Lee, David. (2001) *Cognitive Linguistics*. Oxford University Press. (宮浦国江 (訳) 『実例で学ぶ認知言語学』 大修館書店)
- 牧野成一 (1978) 『ことばと空間』 東海大学出版会
- 酒井邦嘉 (2002) 『言語の脳科学—脳はどのようにことばを生み出すか』 中公新書、中央公論新社
- 澤口俊之 (1986) 『知性の脳科学と進化—精神の生物学序説』 海鳴社
- 鈴木良次編 (2006) 『言語科学の百科事典』 丸善株式会社
- Taylor, John. (1989) *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*. Oxford: Clarendon Press. (辻幸夫ほか (訳) 『認知言語学のための14章』 第3版 紀伊國屋書店)
- 田中茂範・佐藤芳明・河原清志 (2007) 『NHK新感覚☆キーワードで英会話イメージでわかる単語帳』 日本放送出版協会
- 田中茂範・松本曜 (1997) 『空間と移動の表現』 日英語比較選書⑥ 研究社出版
- 高橋太郎 (他著) (2006) 『日本語の文法』 ひつじ書房
- 寺村秀夫 (1992) 『日本語のシンタックスと意味Ⅲ』 くろしお出版
- 戸田市子・石田知子・邢玉芝 (2005) 『入門中国語初級 縁日はとてにぎやか<スリム版>』 郁文堂
- 辻 幸夫 (編) (2002) 『認知言語学キーワード事典』 研究社